



Title	札幌「白雪会」のあふれる生命力：ある『婦人公論』愛読者グループの軌跡
Author(s)	中尾, 香
Citation	年報人間科学. 2002, 23-2, p. 283-301
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5510
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

札幌「白雪会」のあふれる生命力

——ある「婦人公論」愛読者グループの軌跡——

〈要旨〉

本稿は、一九三四年に誕生し今なお活動をつづけている学習グループ、札幌の「白雪会」の活動を跡づけ、そこから時代の変化の意味を考察しようとするものである。「白雪会」は、一九一六年に創刊された雑誌『婦人公論』の、全国に点在する愛読者グループのひとつである。熱心な女性解放論者であった嶋中雄作が入社してまもなくこれを創刊し、一九三一年からは、新たな読者層を開拓していくために先頭に立って全国をまわった。「白雪会」も、これを契機に誕生する。

「白雪会」のユニークさは、戦前から戦中そして戦後へと、ほとんど途切れることなく活動をつづけてきたことである。このように継続してきたことの要因としては、①発会当時に山下愛子という、知性・人望に優れた人物がリーダーとして存在したこと、②戦時中には特高対策のため知人に頼ったり、『婦人公論』の廃刊中に連続して講義をしてくれる講師を得るなど人脈に恵まれていたこと、③中央から著名な作家・思想家が「白雪会」を訪れ座談会をもつなど、知的な刺激にあふれていたこと、彼らが訪れな

くなった一九六五年以降も地元の有識者に定期的に講義を受けていること、④戦後の活動のメインとなる「読書会」も充実したものであったことなどである。

中央公論社のつくりだした「文化圏」のなかで雑誌も読者グループも成長し、メンバーたちはグループに「解放」の場を見出していたということが言える。

キーワード

読者グループ、「婦人公論」、ジェンダー、女性史、女性雑誌

中尾 香

はじめに

カルチャーセンターが現われる前から、さらには公民館や女性センターで学習の講座が開かれるようになるずっと前から、学習を始め、その活動を現在まで途切れることなく継続してきた女性たちのグループがある。雑誌『婦人公論』の全国に点在する愛読者グループの一つ、札幌の「白雪会」である。

一九三四（昭和九）年十月、当時の中央公論社社長・嶋中雄作の呼びかけに応じて発足した「白雪会」は、リーダーである山下愛子を中心に順調な滑り出しを見せた。読書会、講演会、文学散歩をその三本柱として（白雪会一九九三・二〇）、戦時中に『婦人公論』が廃刊されたときにも「白雪会」はほとんど途絶えることなく活動をつづけてきた。二〇〇一年十一月現在において、発足してからまる六十七年が経ったことになる。その間、メンバーも入れ替わり、活動の社会的条件は大きく変化してきたものの、会の活動内容自体に大きな変化は見られない。他者依存的、あるいは他者しだいの人生を歩まざるを得なかつた女性たちが自主的に集う学習グループが、このように長期にわたって存続しつづけるのは並大抵のことではないはずである。

戦後、女性の生活は大きく変化したといわれる。そして、その華々しい変化に、これまで多くの研究が照明を当ててきた。しかし、ありがたいなことではあるが、変化しないものに対して視線が向けら

れることは少ない。「白雪会」は、激動の昭和時代を静かに生きのびてきた、変化しなかつたものの一つである。いや、「変化しなかつた」というのは正しくない。多くのものが変化していくなかで、変化に対してしなやかに対処しながら、「白雪会」としての性格、活動、目的などを失うことなく存続してきた、ということである。

変化しないものを追ってみることで、漠然と考えられていた変化の質のようなものが炙り出されてくることがある。本稿では、「白雪会」の主に戦後の活動を追うことで、女性たちにとってさまざまな社会環境の変化が何を意味していたのか、その一端を明らかにしていこうと思う。

一 「婦人公論」の愛読者グループ

リニユールされ、大判化してカラフルになった現在の『婦人公論』誌面にも、「愛読者グループ便り」として見開き二ページが使われている。たとえば二〇〇一年四月七日発行の「愛読者グループ便り」では、全国で三十三、海外に二のグループとその連絡先が紹介されており、そのうち二十七のグループが「便り」を寄せている。「便り」の内容は、各グループが行った例会の報告であり、『婦人公論』の記事内容にかんする感想や意見である。これらのグループのうちのいくつかは、平成に入ってから誕生したものである。

このような愛読者グループは戦前に編集部働きかけによって各地に組織され、主に「グループ便り」を通して『婦人公論』とつな

がりをもちつつも、それぞれ独自の活動を展開してきた。もつとも、戦争による混乱や雑誌の一時中断によって、ほとんどのグループでは戦前と戦後との間に断絶がある。そうしたなかで、「東京支部」と「白雪会」だけが、辛うじて戦前からの連続性を保って、現在も継続し活動をつづけている。

一・一 愛読者グループの組織化

一九一六（大正五）年に中央公論社から創刊された『婦人公論』は、「他の女性雑誌と違ってほとんど実用記事を載せず、女性解放、男女同権をめざす、インテリ向け女性評論誌として出発」^①する。その創刊に尽力したのが、一九二二年に早稲田大学哲学科を卒業したばかりの嶋中雄作であった。嶋中は、早稲田大学で島村抱月の影響を受けており、熱心な女性解放論者であった（嶋中鵬二一九九三・四）。その嶋中が、入社翌年にあたる一九一三（大正二）年、当時の『中央公論』編集長・滝田樗陰に献言して「婦人問題号」と銘打って夏期増刊号を出し、これが予想以上の好評をよぶ（帯刀一九五五・三七八九）。そしてそのことが、『婦人公論』の創刊へと結びついていくことになった。

そうして一九一六年に誕生した『婦人公論』は、はじめは「難解な文章でつづられ、啓蒙的ではあるが何となくごちなく、女性の好みにはまだ遠い感じ」（松田一九六五・一一）のするものであったものの、「知識婦人」を主な購買層として売れ行きは好調であった。このように順調な滑り出しを見せた『婦人公論』は、その後、新た

な購読者層を獲得していくために、幾度かの大衆化を経験することになる。最初の大衆化がなされたのが、昭和初期のことであった。この頃、他の分野においても、娯楽から学問までさまざまな領域において大衆化がつつぎに進行していた。

大衆化の方法として、誌面改革、誌代の値下げがなされたのに加え、忘れてはならないのが、一九三二年と三四年との二期にわたって行われた、全日本読者訪問・講演会である。これは嶋中が率先して行ったものであり、北は北海道から満州、台湾におよぶ広範な地域を訪問している。彼は「まるで宣教師のように、日本全国を歩き、直接読者との交流を深め」（嶋中鵬二一九九三）、その結果として愛読者グループが、全国の都市部につきつきと誕生していくこととなる。本稿でとりあげる「白雪会」も、これを契機として誕生したものである。

現在のようにマスメディアの発達していない時代にあつて、新たな読者を開拓していくために、このような読者系列化策は当時よく用いられたやりかたであった^②。現代においても、広告収入を見込まない週刊誌『週間金曜日』（株式会社金曜日刊、一九九三年七月二三日創刊）が、その創刊に先立って各地で講演会を開き、読者グループを組織・系列化するというこの古典的な方法を用いている。

伊藤康子（一九八九）によると、戦前に誕生した『婦人公論』の愛読者グループ数は三十九である。そのうち、組織・活動が確立・継続したグループは半分ほどであるという。これらの愛読者グループは、とりわけ一九三四年から四〇年にかけて比較的安定して活動

していた。しかし、それも侵略戦争が活発化するにしたがつて、やがて衰え消滅していった。

一・二 戦後の復活

一九四四年三月号を最後に戦争のため廃刊にされていた『婦人公論』は、戦後、連合国軍総司令部（GHQ）主導のもと、一九四六年四月号より復刊を遂げる。やがて、愛読者グループ復活へむけて、気運が高まってくることになる。愛読者グループ復活の際に重要な役割を演じたのが、「東京支部」および札幌の「白雪会」であった。グループ復活のきっかけは、つぎのようなものであった。これは、当時編集部に在籍していて、のちに『婦人公論』の編集長をつとめることになる三枝佐枝子の談である。

昭和二十二、三年でしょうかね。元の愛読者グループを復活させたいという気持ちで、編集部の中にもあったんです。そこで、たまたま、高田さんが現われたんですよ。高田さんが赤ちゃんをね、そのとき赤ちゃんをおんぶしてたかしら、まあ、なにしろ、現われて、むかし、むかしってその戦前に、私は愛読者グループのねやってたけれどもね、また復活しませんかって言ってきたんですよ。それでこちらも、そんなことをうすうす考えていたので、まあ、それじゃ是非ってことで、高田さんが中心になって東京グループってのを作ったのが、初めなんです。それから、戦前からあった、それこそ札幌だとか、どこかかっていうそういう古くからあ

るグループが次々次々に、また復活したのように、覚えていきますけど。

「高田さん」というのは、ここからうかがえるように、戦後の東京に愛読者グループを復活させた人であり、今なお、名目上は東京グループの会長をつとめている高田綾子のことである。高田が編集部を訪ねたのがいつのことなのか正確にはわからないが、一九五〇年以前のことであるのは確かかなようである。おそらく高田のこの訪問を受けて、編集部では少しづつ、全国的な愛読者グループ復活への構想を練りはじめたと思われる。

一九五〇年十月号に、愛読者グループにかんする記事、すなわち、山下愛子（札幌愛読者グループ）による「愛読者の思い出」および高田綾子（東京愛読者グループ）による「小さな足跡」が掲載される。これは、それぞれのグループのこれまでの活動を振り返ったものであり、「一時は日本全国はいわずもがな、朝鮮に又台湾にまでも生れたグループでしたが、今では札幌と東京に残っているだけなのです。……これを機会にその他の地方に於ても、再び以前の如きグループが復活されることを祈ってやみません。今の世代に於てこそ、嶋中前社長の意図されたようなグループが求められているのではないでしょうか、諸姉の御奮起を望んでやみません」という高田の呼びかけで終わっている。これを受けて、翌十一月号に「愛読者の声」という縦割半頁ほどの欄に紹介された三通の便りのうちの二つは、つぎのように述べている。「心の故郷としての婦人公論が、輝かしく

再起した今日、過去のグループの姿を恋い、懐かしむのは私一人ではないと存じます。／婦人公論が特に連絡の役を買って下されば、ふたたびグループ出現可能のところがあるのではないでしようか。このグループこそ、平和国家、文化国家建設の胎動であると存じます。／……亡くなった島中〔ママ〕前社長も、……私どもの在り方につねに関心をもち、地下から微笑ましく私どもの成長を見ていらつしやるような気がいたします。／誌上を通して、皆さまの消息を伺うをうれは幸いに存じます。／山梨県望月敏枝」というように、グループの復活について、編集部に期待を寄せているものである。

さらにその翌月にあたる十二月、縦割り三分の一頁分を「婦人公論グループ便り」として、すでに活動を再開していた東京グループのこの一年間の活動を、高田綾子がまとめている。少し長くなるが、つぎに引用しておく。

一月二十一日恒例の新年会を精養軒にて開く。新社長嶋中鵬二氏をはじめ編集部の方たちと膝を交えてのなごやかな会合。一月二十七日、婦人公論に発表され好評を博した「夕鶴」の公演を鑑賞後、山本安英氏〔注…主演女優〕を囲んで苦心談をきき、席を変えて演出家岡倉氏、作者木下氏より日本の新劇のあり方を伺った。三月十八日、卓越した外交官与謝野秀氏を招き、「冷たい戦争の話」を、また歌人として母としての晶子女史の思ひ出話など種々拝聴。四月二十九日、同一の仕事をもつ人たちの集団生活として特異の存在である前進座のアパートを見学、河原崎静江夫人の懐旧談を

伺う。五月二十日、「勸進帳」「ロメオとジュリエット」を鑑賞。長十郎の弁慶はなかなかの熱演、久方ぶりで歌舞伎の醍醐味を堪能した。六月二十五日、服飾研究家花森安治氏より女の流行について氏独特の毒舌を聴く。胸のすくような想い。得るところ多々。八月十二日、折からの朝鮮動乱を捉えて日本への影響、世界の動きにつきジャーナリスト福井文雄氏のお話。九月三十日、戦後文学の奇才三島由起夫氏を迎え、「純白の夜」を主題としての座談会をもつ。女性心理の洞察の深さに驚かされる。十月二十八日、読書の秋に因んで国立国会図書館を訪れ、副館長中井氏より図書館の在り方、今後の計画等を伺い、内部を隈なく見学させていただいた。外部はバッキンガム宮殿を、内部はヴェルサイユ宮殿を模した華麗な建物である。毎日四百人の人たちが静かな雰囲気の中で勉強している由。高田綾子

「婦人公論グループ」に入会御希望の方は、……〔住所〕の高田綾子までお申込み下さい。

戦後五年が経ち、生活も少しづつ安定しつつあったこのころ、戦中に抑圧されていた文化的活動への衝動が、このように盛りだくさんのグループ活動の紹介によっていたく刺激されただろうことは想像に難くない。

翌一九五一年には、愛読者グループ復活への気運がしだいに高まり、八月には戦後一回目の愛読者大会が東京で開かれた。これは三部構成で、第一部は三島由起夫・幸田文の両氏の講演、第二部は藤

原義江・大谷冽子両氏の独唱ならびに合唱、第三部は待望の映画、「三島由起夫原作の『純白の夜』が上映された。八月初めに発行された九月号で大会開催の予告がなされたときには、第一部と第二部の内容についてはほとんど触れられていない。「純白の夜」が、「松竹映画株式会社」の好意によって、特に封切に先立ち、提供されたもの」（一九五一年九月および十月号）ということから考えて、まずこのことが先に決まり、あとは慌てて決めていったということかもしれない。十月号に掲載された、大会の報告記事には、大会の盛況なようすについてつぎのように記されている。「愛読者大会を開きたいということは、戦後の久しい懸案であったが、それがいよいよ十数年ぶりに、八月二十六日午後五時から、東京有楽町の読売ホールで、千名に及ぶ参加者を得て開催されるにいたったことは、誠に意義深く、感謝にたえない次第である。／＼残暑厳しい折にもかかわらず、定刻すでに会場は満員、やむなく大勢の方々立っていたただかねばならぬ始末であった。参加者は二十才前後から四十才ぐらいまでの女性が主で、殊に若い方々の姿が目立ち、またそれらの中にまじって、男性の姿もチラホラ見えた……」。この成功をきっかけに、編集部も愛読者グループの組織化へむけて本格的に取り組んでいくことになる。

具体的には、まず十月号に「郵税〔注…郵便料〕本社負担の愛読者カードを挿入」し、これによって読者層や読者の地域分布についての情報を集め、グループ結成にむけての資料にしたようである。翌五十二年一月号で、戦後初めての「愛読者グループ通信」欄が登場する。そこには、「愛読者グループ結成の機運が熟して、各地に

続々と支部が設立されつゝ、あることは、まことによろこばしいことと思ひます。／＼この頁は、これからグループのみなさまに開放して、各地にちらばる読者相互の親睦をはかる、自由なくつるぎの欄にしたいと思ひます……」というようなこの欄が位置づけられている。また、そこには東京・旭川・京都・大阪の四支部からの便りが寄せられている。また、同じ号の別の欄「グループ結成について」では、簡単な挨拶と、「婦人公論愛読者グループ規約（案）」なるものが掲載されている。（「資料1」参照）

資料1

「婦人公論愛読者グループ規約（案）」

- 一、名称 婦人公論愛読者グループ〇〇支部
- 一、目的 地域的に近接する婦人公論愛読者相互の知識の向上・親睦をはかり、婦人公論と表裏一体となって女性文化のために貢献する。
- 一、会員の資格 婦人公論の読者で、本会の主旨に賛同する女性は誰でも参加することができる。
- 一、支部の承認 本会は10名以上の会員によって成立することとし、会員および役員の名簿を本部に提出して支部としての承認を受ける。支部は原則として一都市一グループとする。
- 一、例会 毎月1回例会を開き、婦人公論を中心とする批判討論、その他読書会・見学・ピクニック等を催す。
- 一、会費 通信連絡、その他会合に必要な経費は会員の納入する会費によって賄う。
- 一、退会 理由がなく1年以上例会の出席を怠り、また会費を納入しない場合は退会と見なす。
- 一、講師の派遣 希望により地方別に年1回程度、本部より適当な講師または編集部員を派遣し、講演・懇談会等を行うことがある。
- 一、運営 会員の相互推薦により、幹事1名（場合により、さらに副幹事1名）をおく。幹事は本部との連絡、会の運営についての企画斡旋等にあたる（副幹事は幹事を助ける）。
- 一、本部 東京都丸ビル中央公論社婦人公論編集部内に本部を置き、各支部との密接な連絡にあたる。

この年の四月には、京都・大阪でも「全関西婦人公論愛読者大会」が開催され、これも大盛況であった。以後、各地で続々とグループが誕生していくことになる。

一・三 編集部狙い―「婦人公論」文化圏の構想―

このような読者グループは、編集部から見た場合、どのような意味をもっていたのであろうか。戦前においてそれは、あきらかに地方をもターゲットに販売促進を狙ったものであり、編集部と読者とを結ぶ「生きたパイプ役」であり、「婦人公論」大衆化の実験室（伊藤一九八九・三）としてのものであった。戦後に入社した三枝によると、それは「各地で講演会をすることによって読者を集めるということ、それから、ひとつには、新聞社、それから書店、読者、その三つをうまく結びつけて、それによって販売促進をしようというねらいだったんじゃないでしょうか」と分析される。

戦後の復活期におけるそれも、戦前のもものと大きくは変わらないようである。同じく三枝によると、「読者との結びつきをもっと密接にしたいということ、それから書店との関係とか、新聞社との関係があって、それぞれのそこに拠点が欲しかったわけね。……販売促進・拡大運動の一環としてやりはじめたんじゃないでしょうか」と回想される。また、当時の女性の状況と、「婦人公論」主催の講演会活動との関係については、「その頃女の人は、まだ、そういうグループがないし、勉強したくてもする機会がないから、やっぱり喜んで皆さん集まったんじゃないでしょうかね。だから、わたしなんか

の記憶では、講演会とグループ活動とはかなり結びついてましたよ」と理解されている。女性の側の需要に応えつつ、雑誌の安定と販売促進を見込んだ計算を、そこにうかがうことができる。そして、それはうまくいったのである。

戦後の復活期において、このような話やこの時期の誌面からうかがえるのは、編集部狙いは単に部数の伸びという単一の物差しによる成果だけではなく、「婦人公論」を中心とした女性の文化・エネルギーの結集というような、より大きなレベルでの成果を狙っていたように思われる。女性たちの学習意欲や知的好奇心の盛り上がり渦巻く中心に、「婦人公論」を位置づけることで、雑誌にたいする読者の反応を随時受け取りながら、安定した発行部数を維持できるという計算があっただろうと推測される。つまり、「婦人公論」文化圏」とでもいうべきものを創り出そうとする意気込みがそこにはあり、読者の側もまたそういった動きを歓迎していたのである。「愛読者グループ通信」欄の例会の活動報告に、「婦人公論」とは関係のないようなハイキングや社会見学、「婦人公論」とは関係のない本の読書会の報告などが多く掲載されているのも、この文脈において理解されるのだ。⁴⁾ 「女性解放」へむけての女性たちの活動の核心に「婦人公論」を位置づけていたからこそ、「婦人公論」とは直接に関係のないような女性たちの活動をもフォロワーし支援する構えが、編集部側にあつたと考えられる。

一・四 なぜ「婦人公論」なのか？

——中央公論社にとつての意味——

「婦人公論」の読者にたいするこのような取り組みは、もちろんその大元である中央公論社の方針でもあった。しかし、中央公論社を代表する雑誌といえ、当然のことながら「中央公論」である。では、なぜ、中央公論社は、雑誌「中央公論」を中心とした文化活動・読者の組織化ではなく、「婦人公論」を中心にそれを行ったのだろうか。

このことは、三枝のつぎの言葉に端的に示されている。「これが中央公論となると、非常に難しいんですよ、思想的な問題とかいろいろなもの絡んできて。だから、女性の問題を中心のほうが、まあ、やりやすいつてことがひとつあったんらしいですね。それで、中央公論の読者グループとか、そういうものは作らないで、「婦人公論」のグループを作つて、そして「婦人公論」の講演会つてふうなかたちで……」と。つまり、中央公論社が読者とのつながりを保とうとするときに、「中央公論」はそのパイプ役としてはふさわしくないため、「婦人公論」を中心に読者を組織化していったということである。「女性の問題」も十分に思想的なものを含んでいと思われ、それは世間の価値を脅かすような思想ではないと捉えられていたことのひとつのあらわれであろう。

一・五 戦後の読者グループ

このようにして復活した読者グループは、講演会などをきっかけ

に、各地でぞくぞくと創立されていく。そして、「婦人公論」の黄金時代を築いたといわれる三枝佐枝子編集長（一九五八・六五年在任）のときに、グループ活動も全体として最盛期を迎える。一九五九年に、中央公論社が読者グループにたいして行った調査によると、当時登録されていたグループが九十五あったという。そのうち、回答を寄せたグループが八十九、その八十九グループの会員数が合計三二・三三人、一グループ平均三十六・二人であった。グループ数、会員数とも当時まだ増加傾向にあつたので、最盛期にはもつと全体の規模が膨らんだと思われる。一九七二年、三枝佐枝子が退社した頃から、中央公論社のグループにたいする方針が変更され、講演会を行つたりグループ活動を支援したりすることにたいして消極的になつた。グループ活動は、最盛期に比べて少しずつ蔭を見せはじめるようになる。

グループのメンバー構成は、先ほどの調査データによると、女性に限つた場合、二十代が約五十六％、三十代が約二十七％と、比較的若い年齢層に集中している。また、未婚者が約六十％、有配偶者が約三十六％となつており、どちらかというと未婚者の割合が多い。有職者の割合が約六十三％と当時の平均にしたら高いのも、おそらく未婚者の割合が高いことと関連していると思われる。

注目すべきは、男性が全体の約三％を占めていることである。これは、当時の「愛読者の声」欄に、男性からの便りがしばしば掲載されていることによつても裏づけられる。たとえば、一九五一年一月号にはつぎのような男性のメッセージが掲載されている。「……」

これらの記事に見られる女性自身の言葉、あるいはまた、その道の権威者による女性の心身に関する注意などは、夫（男性）にとり見のがすことのできないものである。それによって幾分なりとも妻の物の考え方、観方、心理状態などの知識を広め、日常生活における自分の妻（女性）に対する理解を深め、それによって妻のよき伴侶とならなければならぬ」。このように、「婦人公論」は、男性と女性との関係についての研究雑誌として、一部の男性からも支持されてきたようである。

各グループが例会を開いたり講師を呼んだりする際の活動資金は、各グループそれぞれが設定した会費と、グループのメンバー数に応じて中央公論社から支給される補助金があった。ピクニックなどのときには、参加者にたいして臨時に会費を募ったようである。

二 「白雪会」

さて、本稿で注目するのは、数多く存在したグループのなかの「白雪会」である。「白雪会」は、戦前から継続して存在しつづけている点、戦時中もほとんど休むことなく活動をつづけてきた点で、これまでに概観してきたグループの中では異彩を放っている。とくに、戦時中に「婦人公論」が廃刊になっていた間も活動をつづけたため、その後は「婦人公論」からはかなり独立してしまい、雑誌とはつかずはなれずの独自路線を歩んできた。

二・一 「白雪会」発足

「白雪会」は、はじめに述べたように、つぎのようないきさつで発足することになった。「昭和九年九月札幌市公会堂で、『婦人公論』主催の講演会が開かれた」（岡路一九八四・八）。この講演会については、「あまり中央の文化に接する機会が多くなかった札幌の街では……大いに歓迎して盛会だった」（山下一九七八・一四）とその盛況ぶりが報告されている。このときの講演会の講師は、下村千秋氏と清沢冽氏であった。そして「終了後、女性だけの座談会がもたれたが、その席上、前社長故嶋中雄作氏より、札幌にもグループを作つて欲しいという話がだされた。多くの女性の賛成があつて、山下愛子さんを中心に準備が進められ、十月六日に発会式が行われてこの会の発足となった」（岡路一九八四・八）。

この第一回の集まりについて、「婦人公論」誌上の「グループ便り」のなかで報告されている⁵⁾。場所は「三八本店の階上」で、時間は六時から十時まで、出席者は二十二名での発会式であった。「お言葉」（注：この日のために嶋中雄作から送られた「札幌婦人公論グループに寄る言葉」）の中にもある通り集団の力、団結の強みこそ私共の生活向上の原動力だと思ひます。出席者二十二名の自己紹介に、議事に、いっばし大会（？）（「ママ」）の形式で会は進行し、最後に談話に移りました。今回は……時間の許す限り自由にお話していただいて、忌避なき意見の交換をこころみて頂きました。愛の問題、結婚に対する擬懼、母に対する不満等まさに紅唇泡をとばさんばかりのシーンを展開いたしました。順境の人は順境なりに、逆境の人は楮

更のこと、各自が自分の現在の精神生活に安住し得られずに、より高い、より明るい、より強い何ものかに向かつて発展し建設して行こうと努力する人々の集りのこととて、朗らかな中にも真摯な意見が夜の更けるのも知らずに飛び交う有様で、お互いに裨益するところが少なくございませんでした」と当日の活気にあふれたようすが報告されている。また、簡単な規約も定められている。(「資料2」参照)

資料2

「白雪会」発会当時の規約

- 一、私達女性の向上のため、新生活建設のために小さくとも力を出し合ひませう。
- 二、会合を毎月一回、第四日曜午後六時半から開きます。場所と中心題目は幹事からその都度何等かの方法でご通知いたしますが、その月々の婦人公論の記事が主になると思ひます。……その他講演会、座談会、見学、ピクニック等、時期に応じて催すことにいたしたいと思ひます。
- 三、会費三十円*
- 四、事務所、札幌市北十六条西四丁目(電話、一一九六) 山下方

*もともとこの金額で掲載されたのか、あるいは再掲されるに写し間違えたのか、いずれにしても多すぎる金額である。「白雪会」の戦前の会費として、別の資料ではつぎのように記されている。「一ヶ月の通信費を十銭とし六ヶ月前納を尤も希望致します。その他席に例会の都度茶菓代として二十銭申受けます。(欠席の場合は不要)」(白雪会1978:写真資料より)。現在の年会費は、3000円である。

発足した翌月の十一月二十五日、会の名前が「白雪会」と決まる。これは、「四十名以上の会員がめいめいに名前をかいて出し、それを投票にかけた」(山下一九七八:一四)とて、山下が提案した

「白雪会」に決まったということである。山下は、発足当時から一九五七年に東京に転居するまで二十三年にわたって白雪会の会長をつとめ、会の要となつて活躍した⁶⁾。

現在では一八〇万人を超える人口を擁している札幌市であるが、それがグループ発足当時はまだ「二〇万人足らず」であり、「いまだ市の水道も行き渡らず、井戸水が使用されていた時代」であつたという。「白雪会」の発足は、「当時の新聞でも『時代に目覚めた新女性性の集り』と報じられ、知的で自由な婦人のグループと周囲から評価された」(一九八九年十月号「グループ便り」より)など、社会的に反響のあつたようすが回想されている。

二・二 「モダンで美人の奥様」山下愛子

山下愛子、といえば、ああ、あの「白雪会」の、と、今でも全国に散らばる愛読者グループの古くからのメンバーたちは、山下愛子という名前をよく知つている。「婦人公論」一九五二年十一月号には、「ルポルタージュ 千歳」というタイトルで、米兵が千歳に進駐したためこの地域にパンパンが急増し、千歳が「人肉のジャングルと化した」ようすを六頁にわたつてわかりやすく解説している。このとき、肩書は、「北海道地方更正保護委員会委員・愛読者グループ札幌支部「白雪会」幹事」となつてゐる。すぐれたリーダーについての三枝の話のなかにも、例としてはじめに出された名前が山下愛子であつた。

彼女は、知性・容姿ともに優れた女性であつたようで、あるメン

バーはその第一印象として「見るからに知性溢れた背のすらりと高い美しい方」(白雪会 一九七八・二五)と記しており、また別のメンバーは「そのころ(注：昭和十年ごろ)にしてはモダンで断髪のお背の高い物やさしい美人の奥様」(白雪会 一九九三・一四)と表現している。また、別のメンバーは、「夏の日のこと、中学校への通学路の南九条通りで上品なスーツ姿に変形ベレー帽の背の高い婦人を見、子供心に目を見張る思いにかられました。当時としては珍しく洋服姿が身につく職業を持つ女性らしい身のこなしと眼の輝きがとても印象的で、その後も幾度かお見受けする度に憧れのまなざしで眺めたことでした。その方が少年保護委員会の委員である山下愛子様で「白雪会」の創設者であることをのちに知り、お会いした日は心が豊かになるような気分でおりました」(白雪会 一九七八・三〇)と、「思いでの白雪会」と題する手記のなかで、山下について長々と述べている。当時のメンバーにとつて、「白雪会」と山下愛子とは、切っても切れぬ関係にあつたようだ。

山下の夫・山下秀之助は、札幌鉄道病院長を勤めたことのある人で、また、「当時(注：戦争末期)北海道歌壇の指導的立場にあり、且つ原始林の主宰者」(白雪会 一九七八・二〇)でもあつた。この秀之助も、「白雪会」には深いかかわりをもっている。戦時中に「婦人公論」が廃刊になったときには、会のために「愛国百人一首」の講義を一九四三年七月から四四年十月まで十三回にわたって行っているし、随時講師役を引き受けてもいる。「こうして白雪会が堅実に成長して来られた過程に、忘れてはならない事は、幹事の山下愛子

様の聡明なお人柄に会員は信頼し、協力を惜しまなかつたことと、御主人の山下秀之助先生の蔭ながらの御力添えがあつたことです」(白雪会 一九七八・二〇)と元会員によつて回想されるように、山下秀之助もまた、「白雪会」の存続のために欠くべからざる人物であつた。また、一九五七年八月に、「山下秀之助氏の歌碑の除幕」が行われたときには、「歌人数数が参加」するなか、「白雪会々員有志も列席」するなど、秀之助と「白雪会」との交流は深いものであつた(白雪会 一九七八・二四)。その歌碑は、「札幌神社裏参道の小溪流を涉つた所の小高い木立の中に素朴に趣き深く建てられて」(同)いるという。

二・三 講師と「ジャンボジェット機」

戦前の白雪会は、ひじょうに講師陣に恵まれていた。地元の知識人や芸術家をはじめ、全国的に活躍している有名作家や知識人・運動家なども、しばしば「白雪会」を訪れ、講演会や座談会を行っている(「表1」参照)。

これは、札幌が地の利を得ていたためであり、たとえば戦前の名古屋グループの活動歴を見ても、ビッグネームは林美美子くらいしか見当たらない(伊藤 一九八九)。「戦前の札幌は、いまのように飛行機による交通の便はなかつたので、せいぜい汽車に乗るしかながつた。そこで、旅行者はどうしても札幌に何日か滞在しないと用が足りないしまつた。そういう滞在中の無駄な時間をこちらに利用させてもらうことで意外な人の話をきくことが出来た。婦人公

表1 講師との交流

年	月	講師	形態
1936	10	杉山平助・林芙美子	座談会※1・講演会
1937	8	杉山平助	座談会
1938	6	川端康成・横光利一・式場隆三郎	座談会・講演会
	7	阿部知二	座談会
1939	6	金子(山高)しげり	座談会
	8	清沢洌・石橋湛山	座談会
	9	久保栄	座談会
	11	清沢洌	座談会
1940	9	中村武羅夫・伊藤整・宮内寒弥・寒川光太郎	座談会
	10	谷川徹三・阿部知二・森田たま	座談会
1941	1	金子(山高)しげり	座談会
	5	丹羽文雄	座談会
1942	8	山高(金子)しげり	座談会
1944	2	山高(金子)しげり	座談会
	10	山高(金子)しげり	座談会
1945	11	久布白落実	座談会
1946	1	百田宗二・伊藤整	講演会
	11	百田宗二 他	座談会
1947	6	川端康成・亀井勝一郎	座談会
1952	7	堀田善衛	座談会
1953	3	知里真志保	座談会
	6	花森安治	講演会
	9	武田泰淳	座談会
	12	知里真志保 他	座談会
1954	10	伊藤整・古谷綱武※2	講演会
1957	5	田中澄江・高見順※3	座談会・講演会
1963	6	幸田文※4	座談会・講演会
1964	6	小田実・曾野綾子・河盛好蔵※4	座談会・講演会
1965	6	秋山庄太郎・円地文子・丹羽文雄	座談会・講演会

※1: 「話を聞く」「懇談会」「茶話会」などという表現もこれに含めた。

※2: 白雪会20周年記念大会

※3: 愛読者大会

※4: 婦人公論文化講演会

論の編集部から「〇〇氏がそちらに行かれます。〇日の〇時から空いているそうです」と通知があったり、地元では道新(昔の北海タイムス)の関口二郎氏がよく連絡をとって下さった。……それらの方々は二度目からは直接お便りを頂いた(山下一九七八・一五七)。当時、本州から北海道へ行くときは、青森から青函連絡船に乗って函館へ、そこから先は汽車で、という旅であったようだ。

とつてみれば、皮肉なことに、交通が発達したために講師が訪れなくなってしまう、一方でテレビが普及してその埋め合わせをした、という図式である。

ただし、一九六五年以降は、著名人が訪れることはなくなったものの、先ほど紹介した岡路さんの夫・北海道教育大学教授で社会学専攻、学長も勤めたという岡路一郎氏や、北海道大学教授の本

しかし、このような講師たちは、一九六五年をかぎりに「白雪会」をバッテリーと訪れなくなってしまつた。その理由については、現在の会員である堀口さんと岡路さんはつぎのように説明してくれた。「飛行機がでるとね、みんなとんぼ返りしちゃうの。前はゆっくりのんびりやってたみたいよ。昭和四十年くらいはまだね」「だいたい三十九年くらいで講演はなくなつたのね。結局テレビができてね。テレビで作家なんかいろいろするでしょ。だから、そんなに呼ぶ必要がなくなってきたっていうのがありますね。時代でもって変わってきているわね」。

日本にジャンボジェット機が登場し、飛行機による大量輸送時代へと突入したのが一九六四年のことである。そして、最後の講師陣が「白雪会」を訪れたのが一九六五年。また、白黒テレビの普及率が九十%に達したのが一九六五年、その後一九七〇年代にかけてカラーテレビが普及していくことになる。「白雪会」に

田錦一郎氏、北海道新聞出版部長平松敏雄氏など、地元の知識人たちが定期的に「白雪会」でテーマを決めて話をしていく。とりわけ、本田氏は毎年一・二回三十年以上にもわたって「白雪会」で話をしており、それは現在もつづいているという。「大学生ってこのごろみんなよく聞いてくれないから、ここへ来れば奥さんがたが一生懸命に聞いて下さるっていうんで、喜んで来て下さるの」ということである。

二・四 戦時中の活動

先に述べたが、「白雪会」は戦争中もほとんど休まずに活動をつづけてきた。一九四四年の十一月と十二月、そして五年の二月から七月までを休んだだけである。すべてにおいて窮屈になっていた戦時中に、このように会が継続されたということは、何よりもメンバーたちの「白雪会」にたいする熱い思いを証明している。また、特高に睨まれたときにも、当時の札幌控訴院長の力添えで事無きを得たり、戦時中に歌人山下秀之助という講師を得たりと、メンバーたちの人脈が豊かであったことも見逃せない。

二・五 終戦直後とクリスマスパーティー

「今度の戦争に勝つとは思っていなかったけれど、敗けてみると口惜しくて泣いた。同時にほっとしたことも否めない。敗戦後十日目頃だったと思うけれど、誰言うともなく集まろうということになり、終戦後初めての例会を持った。人数はたった七人だったが、めっちゃ

くちゃにおしゃべりをして別れた。次から古い会員も次第に会にもどって来て……」（山下一九七八・一七八）とあるように、敗戦後の八月二十六日には、早くもメンバーが集って活動を開始している。米軍も「白雪会」には一目おいていたようで、つぎのようなエピソードがある。少し長くなるが、紹介しよう。

敗戦の年も暮れようとするある日、月寒の米軍兵舎からアーサーという中尉が、中村という日本人の通訳をつれてジープで私の家へやって来た。瞬間どきりとしたが、話はクリスマス・イブに招待したいとのことであった。

「おまえ達のグループは極めて民主的な婦人の集りだと聞いています、白雪会のレディーを五十人招待したいから来てくれ」と言う。街ではアメリカ兵不信の声の最中だったので、二、三日返事を待ってもらい、慎重に協議の結果応ずることにした。今後の日米親善の一助にもなればと思ひ、友の会の上田歙子さんの方からも何人か出して頂いて人数を揃え、迎えのトラック二台で雪道を月寒に向った。日本のレディーを招待するのだから先方もジェントルマンであろうと、一同きれいな和服で行った。この何年来、私たちが見たことも食べたこともない立派なごちそうが山のように出て、明るいクリスマス・ツリーの下ではジャズの演奏が絶えず行われた。

クリスマスが終ると「お礼言上に伺いました」と再びアーサー中尉がやって来た。月寒のニューヨーク部隊は、日本の節度に気

を使っているという話であった。(山下一九七八:一八)

その後も米軍との関係はつづき、一九四七年には四月と八月の二回、「米軍のグロスター夫人」と座談会など交流をもっている。

やがて、「婦人公論」が一九四六年四月に復刊し、九月に主幹の谷川徹三氏が札幌を訪れる。これによって、「白雪会」はふたたび「婦人公論」と関係をもつて活動していくことになる。

二・六 戦後の活動

現在の「白雪会」は、読書サークルとしての性格が強い。「婦人公論」ともほどよい距離を保つてつきあいながら、さまざまな本を読みすすめていっている。「白雪会」がはじめに「読書会」を行ったのは、一九五七年二月のことである。そのときは、ジイドの「狭き門」をとりあげている。それから、ほぼ毎回、例会に「読書会」が設けられることになる。

戦争中は思想統制のため情報が乏しく、情報があつたとしてもそれは歪められた情報であることが多かった。戦後はその反動で知識欲が強まったという。「読書会」は、そのような知識欲に応える意味も担っていたと考えられる。戦後しばらくは外国人作家のものが多く、先ほどのジイドのほかに、ヴェーデキント、リルケ、バルザック、トルストイ、ドストエフスキー、ジョルジュ・サンド、モーパッサン、マーガレット・ミッチェル、シユトルム、トーマス・マン、シェイクスピアなどが読まれている。また、そのころの日本人作

家・思想家のものとしては、有島武郎、三木清、武者小路実篤、尾崎秀実、宮本百合子、鈴木三重吉、阿部知二、林芙美子、石垣綾子、伊藤整などがとりあげられていた。「徒然草」や「和泉式部日記」など、古典にも関心が向けられている。

一九七〇年に入ったころから、たとえば、ポーヴォワールの「第二の性」、「講座おんな・なぜおんなか」(筑摩書房)、井上清「日本女性史」など、いわゆる女性問題にかんする文献も読まれるようになっていく。⁽⁸⁾

二・七 「白雪会」のメンバーと会の継続性

一九七八年に編まれた「白雪会四五五年のあゆみ」のなかに、メンバー・元メンバー合わせて五十名にたいして実施したアンケートの結果が掲載されている。ここでは、そのデータを中心に、「白雪会」のメンバーについての概略をまとめておきたい。五十名のなかには、一九七八年当時にメンバーであった者も含まれるし、すでに何らかの理由で「白雪会」を去った者も含まれている。

まず、在会期間は、一年間から三十一年間まで幅がある。一九七八年当時に在会しているものに限ってみれば、「表2」のようになる。数年しか在会しないものが多い一方で、十年以上にわたって在会しつづけているいわば「コア・

表2 1978年に在会していたものの在会年数

在会期間 (年間)	人数 (人)
1-5	4
6-10	4
11-15	2
15-20	5
計	15

メンバー」といってよいものも多い。「白雪会」は、多くの人たちを引きつけながら、実質的にはこの「コア・メンバー」によって守られてきたということが言えるのではないだろうか。

また、「そのとき私は」という項目で、在会中の属性について聞いているものがある。これを整理すると、「表3」になる。

「その他」に含まれるものは、「鉄道職員」、「家事手伝い」、「北海道新聞記者」、「事務（国家公務員）」、「商社員」、「社会党本部の書記」、「銀行員」、「自営業」などである。

入会の動機を聞いた問にたいしては、一九六〇年以前に入会した者二十二名のうち五名が、「婦人公論」を愛読していたから」と答えている。それ以外に、「婦人公論」で「白雪会」の情報を得て入会したというものは、全体で七名である。五十名のうち、雑誌によって入会する道筋が与えられたものが、合計一二名いることになる。「婦人公論」の「グループ通信」欄が、会の存続に深くかわつていくことがわかる。

在会中に印象に残ったことは何か、という問にたいして圧倒的に多いのが、「講演会」や「講師の話」である。一九六五年以前については著名人による講演会が圧倒的に多く、それ以降についても、随時「白雪会」で講義を行った諸先生方の話が印象に残っているとい

表3 在会中の属性

属性	人数(人)
主	*30
婦	6
員	2
教	12
そ	
の	
他	
計	50

※このうちの1名は、在会中に再就職している。

う。また、一九五〇年以降については、読書会でとりあげた本のことや、自分が発表を担当したことなど、あるいは文学散歩などが印象に残っているとすることが多くなっている。

講師に恵まれていた、ということは、戦前から戦後へと「白雪会」が存続しつづけてこられたことに大きく関係しているのではないだろうか。著名な作家の話の聞いたり、そういった有名人たちや「婦人公論」の社長をはじめ編集部の人たちと「膝を交えて話をする」という経験は、ひじょうに刺激的でまた楽しいものであったようである。一九六五年以降、中央から著名人が訪れることがなくなつてからも、地元の有識者たちが「白雪会」で専門的な話をしており、それはビッグネームたちとの交流ほどスリリングなことではないにしろ、メンバーたちの知的興味を刺激し満たすだけの力をもつていたようである。また、メンバーたちが回日もって担当していく「読書会」も、自分の推薦した本をメンバー皆が読むということ、また皆の前で発表しなくてはならないなど、知的な緊張感をメンバーに与えている。これらの要素が「白雪会」を魅力的なものにし、そのために会は継続してきたのだと考えられる。

おわりに——「女性解放」の意味——

「白雪会」は私のオアシスでした（白雪会一九七八・三六）と、あるメンバーが記している。また別のメンバーは、「白雪会の美しい伝統、すなわち、いかなる枠にとらわれない自由さと静かな情熱、

清潔で人間味に溢れた温い雰囲気」（岡路一九八四）と述べている。その他にも、「私にとつて白雪会の魅力は、なんといつてもこの自由なのびやかさだと思えます。そしてこの偏らない自由さは……」（白雪会一九七八・五一）、「限られた時間ではとても言いつくせぬ、話しつくせぬ、熱っぽい論争を交わすこともありました」（同・四八）など、メンバーたちは「白雪会」の魅力について述べている。

また、自身の入会の動機について「結婚して六年、年子で生まれた二人の子の育児と家事だけの生活から何かを求めていた時、子供と散歩の途中立ち寄った書店の中で手にした一冊の雑誌、それが婦人公論でした。読書グループ便りのページで白雪会を発見した喜びは大きく、子育ての中でも本だけは読みまくっていた私にとつてまさにうってつけの会だと思いとびついたのが動機です」（同・四六）と書いているもの、あるいは「私は全く家事と育児の中に埋もれていたのです。子供はとても可愛いと思い、結婚生活もそれなりに楽しい毎日でしたが、落ちついて読書をする事など出来ませんでした。小さい時から本好きだった私にとつて、その事はやりきれなく、悲しみが内に積み重なって行くようでした。……そんな頃、婦人公論の案内で白雪会を知りました。とびつくような思いで出かけ、早速入会させていただき、それから月に一度日曜日には子供を主人にあげずけて出席するようになったのです」（同・二五）など、「白雪会」が育児期の女性たちの解放される場であったことを物語っている。

また、戦時中には、「戦争末期の、あの暗い青春時代の悪夢のような日々にオーバークラップして、白雪会での人間らしいひとときが、

いま、貴重なことに思い出される」（同・二二）というように、「白雪会」が戦時体制からくる息苦しさから解放される場であったことを示している。

さらに、「院内を歩けるほどになりましたある日許可を得て売店まで行き手にした本が『婦人公論』でした。……わくわくしながらはずむ心を抑えて、活字を追いしました。その中で会の所在地を記した一行が目にとまったのです。／その瞬間、まるで一目惚れのように入会してみようと決めました。それからは、マンネリ化していた闘病生活に張りが生れ、当面の目標に向かって「頑張ろう」と精神的にも上向きになり……」（白雪会一九九三・三五）や、「私にとつて辛かったことは病棟の書棚に婦人公論を見つけ、……夢中になって読み、強い衝撃を受け共感し、元気になったらきつと白雪会に入会して自分なりに学んで行こうと心に決めたことである」（同・一八）というように、彼女たちにとつて「白雪会」に入会するということは、闘病生活からの解放をも意味するものであった。「白雪会」は闘病生活を活気づけ、励まし、希望を与えうる存在だったのである。

つまり、「白雪会」は、さまざまな境遇にある女性たちを「解放」する場として機能していたということが言える。それが、「法的平等」や「制度的平等」を意味する「女性解放」とどのような関係にあるかはともかくとして、とにもかくにも「白雪会」は、それに参加した多くの女性たちを「解放」してきたのだ。そして、それは編集部や中央公論社が構想した「婦人公論」文化圏が存在したからこそ、可能なことであつたのだろう。

「女性解放」については多くの議論が蓄積されており、それらとここで述べた「解放」の意味とを突き合わせて論じていくことは、紙幅の関係で今後の課題としたい。

〔追記〕 本稿のために得難い証言と貴重な資料を提供して下さった、三枝佐枝子氏・岡路美知子氏・堀口美紗子氏に、記して、厚く感謝したい。

なお、引用の際に、旧仮名遣いを新仮名遣いに改めている箇所があることをお断りしておく。

〔注〕

- (1) 井上輝子によるCD-ROM《世界大百科事典 第二版》「婦人公論」の項より。
- (2) 実業之友社や講談社による講演会活動（木村一九九二）、また女性誌では『婦女界』誌による系列化策、『主婦之友』などの読者を対象とした講演会や文化活動（前田一九七三・二八〇一）が、早くから行なわれていた。
- (3) 二〇〇一年八月三日、『婦人公論』の元編集長・三枝佐枝子氏宅にておこなった聞き取り。以後、三枝の話として引用してあるものは、とくに断わりのない限り、このときのものである。
- (4) 現在の「グループ通信」は、『婦人公論』の誌面にかかわる内容に限定されている。
- (5) この「白雪会グループ便り第一号」についての情報は、（白雪会一九九三）に再掲されたものを参照した。
- (6) グループの代表者の呼称については、「幹事」「会長」「世話役」などがあり、これらの呼称がどのように使分けられているのかあるいはいないのか、定かではない。山下にかんしては、一九五〇

年三月の例会で「幹事変更の相談」をした記録があり（白雪会一九七八・九二）、また「幹事をなかなか変えて（ママ）頂く方がなく、翌々（一九五二）年無理に木村逸子さんに引受けて頂いた」（山下一九七八・一九）という山下自身の手記から、このころ山下が会の代表を退いた可能性もある。しかし、記録として正式に残っているのは、一九五六年十二月の例会のときの「総会、幹事を木村逸子に変更」（白雪会一九七八・九五）というものである。また、創設から一九五七年まで「創始者の山下愛子さんが世話役」（岡路一九八四）という表現もあり、どちらにしても、発足時から山下の転居時まで、ほぼ山下が一貫して会の中心的存在であったことは間違いないだろう。

(7) 二〇〇一年七月二十六日札幌にて、「白雪会」現会員である岡路美知子氏および堀口美紗子氏にたいする聞き取り。以後、断わりのない限り、岡路氏および堀口氏の話は、このときのものである。

(8) ここまでに紹介した「白雪会」の活動については、とくに断わりのないかぎり、（白雪会一九七八）および（白雪会一九九三）の巻末にそれぞれまとめている「白雪会沿革」を参考にした。

〔引用文献〕

- 伊藤康子、一九八九、『婦人公論』読者グループの軌跡、「中京女子大学紀要」第二十三号。
- 木村涼子、一九九二、「婦人雑誌の情報空間と女性大衆読者層の成立―近代日本における主婦役割の形成との関連で―」、「思想」八二二。
- 前田愛、一九七三、『近代読者の成立』有精堂。
- 松田ふみ子、一九六五、『婦人公論の五〇年』中央公論社。
- 岡路美知子、一九八四、『白雪会五〇年のあゆみ』、『婦人公論』一九八四年二月号。

嶋中鵬二、一九九三、「白雪会の六十年によせて」、「白雪会のあゆみ」白雪会

白雪会、一九七八、「白雪会四五年のあゆみ」。

——、一九九三、「白雪会のあゆみ」。

帯刀貞代、一九五五、「婦人公論」の四〇年」、「中央公論社七〇年史」中

央公論社。

山下愛子、一九七八、「白雪会と私」、「白雪会四五年のあゆみ」白雪会。

'Shirayuki-kai'(Snow White group) of Great Vitality :the Trace of a Devoted Group of Fujin Koron

NAKAO Kaori

The purpose of this paper is to trace the activities of the reader's group in Sapporo, '*Shirayuki-kai*'(Snow White group), which is one of the devoted groups of the women's periodicals *Fujin Koron*(*Women's Central Review*) and to consider the meaning of the transition of the times.

The uniqueness of this group is that it has been continued since prewar, through the wartime, to postwar almost without a break. The moments of this continuity are thought to be:

1. It had had an eminent leader *Aiko Yamashita* since the group started.
2. It had been helped by many people when it was kept an eye on by the special secret service police, or when it lost the magazine in the wartime, which was in the center of their activities.
3. Many well-known writers and thinkers visited there from the beginnings to 1965, and after that some intellectuals in the district lectured periodically or whenever necessary.
4. Its reading activity which started after the war has been attractive.

In the cultural sphere created by the company *Chuo-koron*(*Central Review*), both the magazine and the reader's group developed, and the members found out the 'liberation' in the activities itself.

Key Words

reader's group, '*Fujin Koron*', gender, women's history, women's magazine